

# C・M・Sの日本開教伝道

木 村 信 一

## 序 論

1. C・M・Sの中国伝道と日本伝道の関連
2. C・M・Sと琉球海軍伝道会
3. エンソー・バンサイド両師の閲歴
4. エンソー・バンサイド両師の長崎伝道
5. エンソー師とその著書

む す び

## 序 論

C・M・SとはChurch Missionary Society for Africa and the Eastの略称である。1786年、英国においてその国民の伝道心を覚醒する三大事象が生じた。その(1)はウィリアム・ウィルバーフォース(William Wilberforce)の奴隷売買廃止への献身であり、その(2)は解放された奴隷のため、西アフリカのシーラー・レオン(Sierra Leone)地方に居住地設定の計画であり、その(3)はエクレクティック協会(英国国教会の福音主義に立つ少数の聖職信徒の団体)が、始めて海外伝道を話合ったことである。エクレクティック協会はその後幾度か討議を重ね、1799年2月、ジョン・ベン師(Rev. John Venn)の議長の下に開催された会合では、将来、C・M・Sの大綱となった4カ条を決議した。第1は“共同の目的のために同調することは基督者の義務である。”第2は“靈的な働きは靈的な人物に依ってなさねばならない。”第3は“伝道は英国国教会の原則に基礎づけられねばならないが、ハイ・チャーチ主義の原則には依らない。”第4は“聖職を見出しえぬ場合は、平信徒を送るべきこと”であった。当時すでに伝道団体としてS・P・G並びにS・P・C・Kが活動していたが、主として北米の英国民の間の伝道で、しかも甚だ低調であった。同年4月12日、ロンドンのカスル・アンド・ファルコン・ホテルの二階に、同志の者、聖職16名、信徒9名が参集して、ジョン・ベン師が再びその議長となり、討議の結果、次の決議を行なった。“S・P・C・K及びS・P・Gはその伝道活動を北米並びに西イ

ンド諸島に移住せる英国国民に制限しているのので、英国国教会は更に伝道団体を設立し、アフリカ大陸、その他異教徒の地に宣教師を派遣することの必要を認める。” 依って“本会議に出席せるわれわれはこの目的遂行のために、伝道団体を組織する” という宣言を行った。この創立会議は団体の名称を決定しなかったが、6カ月後の第2回の会議で“The Society for Missions to Africa and the East” と命名した。さらに1812年の会議は現行の名称を採択して、“The Church Missionary Society for Africa and the East” と改称し、以来150年余を経ているが、その名称に変更はない。<sup>(註1)</sup>

C・M・Sの正式名称には for Africa and the East が附せられている如く、その伝道の対象地域は先づアフリカであった。C・M・S設立の誘因は、奴隸解放と解放された黒人であった。1840年、C・M・S最初の両宣教師が派遣された土地は、彼らの定住地西アフリカのシーラー・レオン地方であったのである。次に the East はどの地域を意味するかというと、始めは印度、セイロン、中国、ダットン地方、ペルシャ、アラビヤ語使用の地方を考えていたが、余りにも広大なので、これを印度、セイロンに限定として1814年、最初の宣教師兩名が送られた。日本伝道については、C・M・S設立当初は、その計画のうちには全く含まれてはいなかったが、C・M・Sと日本伝道の関連は阿片戦争（1840年～42年）の後である。勿論その以前に中国伝道中の新教各派の宣教師によって、早くより英和辞典、邦訳ヨハネ伝の刊行が見られたが、現実にC・M・S宣教師が日本に上陸したのは1869年1月（和暦換算は明治元年12月）のことである。本稿に「C・M・Sの日本開教伝道」と題したのは、C・M・S宣教師が日本上陸後、極く初期の6、7年間の伝道を対象とするのである。すなわち宣教師エンソー・バーンサイド両師の伝道時代を指すのである。さきに日本聖公会歴史編纂委員会が、「日本聖公会百年史」を編して出版したが、その初期伝道時代を通読してえた印象は、米国聖公会伝道局側の資料をよく整理して引照しているが、C・M・S側の根本資料を殆ど駆使していないように思われる。筆者はC・M・Sに恩顧を蒙る者である。特にC・M・S宣教師として来日され、いまは英国イリー教区の補佐主教の職にあるウォルシュ主教より受けた恩義は、生涯、忘れえぬものがある。依って筆者の念願は、歴史としてのC・M・S日本伝道史を完成したいことにある。本稿はそのために収集した資料の発表という予

備的な作業であり、過誤もあり、不備も少くないと思うが、先輩、友人の叱正を得ることができれば欣幸とするところである。

さて伝道とは何かという問題があるが、これを研究対象とする学問を伝道学(英Missionology, 独Missionswissenschaft)と呼んでいる。由来キリスト教は伝道と宣教の宗教と言われ、それらの実践活動によって教会の生命を拡大し、深化せしめたのであった。この伝道の研究は永く独立した科学として取り扱われず、或は教会史、或は実践神学の一分科、または従属するものと考えられていた。これを伝道学として独立の研究が主張され始めたのは、第19世紀の後半でドイツにおいてである。伝道に関する学的研究の勃興にともない、ドイツの諸大学に伝道学が開講され、英米においても1910年、エディンバラにおける世界伝道会議の結果、伝道研究に関する強い刺戟が投ぜられた。さらに近来に及んでは、英米各地の大学、神学校においても伝道学が開講されることになり、また幾多の伝道学の名著が発行され、ラトーレット博士(Prof. K. S. Latour-ette)の東西両教会とプロテスタント教会にわたる大部な伝道史を始め、伝道理論については、キャノン・ウォレン師(Canon M. A. C. Warren)の好著も出版されている。しかし何といても伝道学はドイツが元祖なので、ドイツの伝道学の大系を紹介をいたしたい。ドイツにおいてはカトリックとプロテスタント両派の大系があり、カトリック側はその伝道学の創始者と呼ばれる、ヨーゼフ・シュミトリン(Joseph Schmidlin)の古典的名著があり、プロテスタント側ではベルリン大学のJ. リヒター教授(J. Richter)の著作が権威とされている。シュミトリンによると、伝道学はこれを両部門に分け、第1部門を伝道記録と呼び、第2部門を伝道理論と呼んでいる。さらにこれを細分して第1部門を伝道史と伝道諸記録に分類し、第2部門は伝道原理論と伝道方法論に分けている。そして伝道史の取扱う時代的制限については、初代キリスト教会より現代にいたる全歴史を取り扱うものとしている。伝道諸記録においては世界伝道の様子を、地理的に、統計的に、また記述的に取扱っている。<sup>(注2)</sup>これに対してリヒター教授も伝道学を2部門に分類しているが、これを伝道史と伝道理論に分けて探求している。第1部門には細分がなく、第2部門は 1. 聖書的基础 2. 伝道理論 3. 伝道弁証論の3部に分け、しかも伝道史に重要性をおくところに特色があり、時代的制限については、宗教改革以後に限る見解を有して

<sup>(注3)</sup> いる。かくの如く従来は教会史の1部として考えられていたキリスト教の伝道は、現代においては明かに伝道学という独立の学問としてキリスト教神学中に位置づけられていることを忘れてはならない。

次に伝道とは何かという問題であるが、伝道とは mission の訳語である。mission は元来ラテン語の missio に由来するもので、英、独、仏いづれも mission を用いており、この語は元来、“派遣” “送る” の意で、必ずしも宗教的用語ではなく、政治、外交の面において派遣される使節団が mission であったが、現在はキリスト教的用語に用いられる場合が多い。mission を簡単に説明すると、キリスト教の信仰を宣べ伝えることであるが、この場合、信仰を伝える主体と、それを受ける客体、すなわち対象とがある。その受ける対象によって、或は home mission と呼ばれ、foreign mission と称される。home mission とは、自己の国内の無信仰者に伝道をすることで、米国においては黒人、インディアン人、ユダヤ人、さらに移民として渡航した日本人、中国人等に伝道することも home mission である。foreign mission とは非キリスト教国における異教徒へキリスト教の信仰を福音を伝えることがそれである。さらに伝道をする主体は誰かという問題がある。勿論、宣教師であり、伝道者であることには違いないが、その根源をさらに尋ねると、それは神であり、主キリストであって、宣教師はその手足にすぎない。キリスト教の伝道は主キリストの至上命令による遂行であるという信念は、既にキリスト教の原始時代において、異邦人教会のうちにもあったものである。<sup>(注4)</sup>それが新約聖書中の、“それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として” (マタイ28の19) “全世界に出て行って、すべて造られたるものに福音を宣べ伝えよ” (マルコ16の15) という主キリストの御言が、それを示している。

## C・M・S の中国伝道と日本伝道の関連

C・M・S の中国伝道は、1799年、C・M・S の創立直後に、幾度か本部役員会の議題に上り、中国へ宣教師派遣の可否が論ぜられたが、先づアフリカ伝道に着手すべきことが決定された。1804年、最初のC・M・S 宣教師M・レンネル師 (Rev. Melchior Renner) 並びに P・ハートウィグ師 (Rev. Peter Hartwig) が、西アフリカのシーラー・レオン地方に派遣され、<sup>(注5)</sup>中国伝道はさた止みとな

った。1824年、中国新教伝道の父、ロバート・モリソン師 (Rev. Robert Morrison) は、その滞英中に C・M・S 本部を訪れ、C・M・S 宣教師の派遣方を要請したが、その機は熟してい<sup>(注6)</sup>なかった。その後10年が経過した。1834年、C・M・S 本部役員会は、カール・ギュツラフ師 (Rev. Karl F. A. Gützlaff)<sup>(注7)</sup>の中国伝道を議題とした。師の著書「支那航海記」(Journal of Three Voyages to China) は師の中国沿岸伝道航海の日記であるが、これを読んだ英、米、独、蘭の諸国人に多大な感銘をあたえた。そして中国に対する新たな認識を喚起した。この状勢を知った C・M・S 本部役員会は、協議の結果、ギュツラフ師に後援金 300 ポンドを贈ることとし、中国伝道に関する師の意見を徴した。彼はこれに答申して、“中国におけるヨーロッパ人の受ける困難と危険を、自己の体験を通じて述べ、併しながら自分はなおも生存しており、己が弱きときに神の働きが遂行されている。恐らくキリストの使徒たちも、宗教改革者たちも、中国政府がキリスト教に好意をよせるまで待機することなく、神に依り頼み大胆に福音を語るであろう”と述べ、派遣さるべき宣教師の資格については、“ゼントルマン階級出身者でなく、常時、救主キリストのために生命を捧げうる者”<sup>(注8)</sup>とであった。このギュツラフの答申を受けた C・M・S は、中国の国情の調査と中国語の研究のために宣教師を送ることを決議し、その選を受けたのがエドワード・B・スカイヤー氏 (Edward B. Squire) であった。スカイヤー氏は英国ブリモスの出身で、英国東印度艦隊に所属する海軍士官であったが、帰国後、田舎に牧師として隠棲中のキッド師 (Rev. Samuel Kidd)<sup>(注9)</sup>の下で中国語を修得したのであった。彼は C・M・S の呼びかけに応じて、宣教師を志願し、中国伝道者の最初の光栄を獲得した。当時、氏は聖職ではなく、信徒であったので、C・M・S 最初の中国宣教師は信徒であったのである。氏は1836年(天保7年)7月26日、英国を出立し、中国に向った。当時の中国状勢は、1833年、東印度商會が極東貿易独占権の喪失に伴い、印度より多量の阿片が中国へ流出し、中国到着の英国船舶はいづれもこれらを多量に積載していたのであった。英米宣教師の中国渡来もこれらの船舶を利用したので、宣教師は阿片と同様に中国に害毒を流すものとして、中国官憲はその入国を拒否した。スカイヤー氏はシンガポールを基地として、中国諸港を歴訪の上、調査する予定であったが、マカオ以東の旅行は不可能であった。氏の中国滞在中は、阿片問題で国情は騒然とし

ており、英・中両国は国交断絶の寸前にあった。依ってスカイヤー氏はC・M・Sに書面を送り、“中国に介在する幾多の困難に直面するときに、今は新しく中国に伝道を開始する時期にあらずと思考する”旨の報告をして、1840年1月、帰英した。<sup>(註10)</sup> 彼が予想した阿片戦争は同年6月に勃発し、C・M・S中国派遣の最初の宣教師は、何らの成果をみずして失敗に終わった。スカイヤー氏は帰国後、司祭按手を領し、生涯 Vicar of Swansea. として送り、晩年はC・M・S終身理事に挙げられ、1876年に逝去した。斯くの如くC・M・S最初の中国伝道調査は何ら見るべきものがなかったが、阿片戦争の終結に伴い、英国国民の中国及び日本に寄せる関心が喚起された。

この戦後、C・M・Sは第2回の中国伝道調査を行ない、G・スミス師とT・マクラッチィ師の両名を派遣した。スミス師はのちに中国初代主教に挙げられ、マクラッチィ師は中国古典学者として著名であった。

ジョージ・スミス主教は(Rt. Rev. George Smith)は、オックスフォード・モードリン・カレッジの出身で古典学科を優等をもって卒業し、司祭に任ぜられ、1844年、マクラッチィ師(Rev. T. McClatchie)と共に、第2回中国伝道調査のためC・M・Sより派遣された。これは“'Ελαχιστοῦτερος”（最も小さい者より小さい者）と名乗る無名氏が、その公債を処分して6,000ポンドの寄贈によるものである。両師は香港を始め、5開港地を歴訪した報告書は、英国の信徒の伝道心を喚起し、中国伝道開始が決定された。翌47年にラッセル、コボルド、ファーマーの3師が送られ、次いで新たに香港ビクトリヤ主教座が設定され、スミス師は中国初代主教に聖別されたのが1849年で、C・M・S宣教師による主教就任はこれが第2回目である。主教在位15年で辞職して帰英し、ロンドンの南方ブラックヒースに隠退して1871年に逝去した。スミス主教とC・M・S日本伝道の関連は、同師は日本を訪れた最初のC・M・S宣教師であった。主教は1860年（万延元年）4月7日に長崎に上陸し、5月15日まで38日間、同地に滞在し、次いで5月19日より6月12日まで横浜、江戸に滞在して函館に向い、同地よりサンフランシスコへ出帆した。同主教の10週間にわたる日本滞在は、将来の日本伝道に関する予備的調査であり、師は日本人の知識欲に燃えていることを嘆賞している。同主教はベッテルハイム訳、安政5年版の漢和対訳の「路加伝福音書」を100部持参して、そのうち長崎のウィリアム

ズ、フルベッキ諸師にその1部分を頒げ、残部は横浜のブラウン、ヘボン、シモンズ諸師のもとに留めて、同訳路加伝の日本伝道に有益なりや否やの意見を求めた。スミス主教の所見としては、切支丹禁教下の日本にあっては、聖書普及による伝道着手が先決と考えたのである。さらにスミス主教と日本伝道の関連については、同主教はベッテルハイム博士に次いで琉球伝道に赴いたモーアトン師 (Rev. G. H. Moreton) を、英国国教会の執事に按手している。これは1853年10月上海を訪れ、上海における英米両聖公会の主教執行権を協定した折に、他のC・M・S宣教師の司祭按手と同時に、モーアトン師を執事に授按したのであった。

第2回目の訪日はアルフォード主教 (Rt. Rev. C. R. Alford) によって行われた。同師にロンドン・ハイベリー師範学校長として、多くの学校教師をアメリカ、印度の伝道地へ送り、次いでロンドン・イズリングトン教会牧師であったが (同教会は著名な福音主義の牧師、副牧師を輩出し、現ヨーク大主教コーガン師も同教会に副牧師として勤務した。) 選ばれて香港ビクトリヤ教区第2代主教に就任した。師は日本初代C・M・S宣教師エンソー師の着任の直前に日本を訪れ、在日中の他教派宣教師に新任者の紹介の労をとっている。長崎においてはウィリアムズ主教、横浜においてはヘボン師等に逢い、それらの地に居住する少数の英国人官吏、商人に聖餐式を執行している。これは1868年 (明治元年) 11月中、短時日の滞在中のできごとであった。同師は当時までに日本内地で7名の日本人が、新教宣教師によって受洗したと報告している。アルフォード主教は中国、日本の伝道のために種々の新しい立案をC・M・S本部へ進言したが、いずれも実行されなかった。そのうちに“C. M. S. for the Far East”の案があり、“for the Far East”には中国、日本、朝鮮、満州、蒙古、琉球、台湾、泰国を含めたC・M・S極東伝道会を設立する創案であったが、本部を始め、一般英国々教会信徒の賛同をえられずに消滅し、1872年、師は失意のうちに香港の主教を辞任した。

第3回目のC・M・S宣教師の日本訪問と視察は、後の初代北部中国主教、ラッセル師 (Rt. Rev. W. A. Russell) であった。師はアイルランドのダブリン・トリニティ大学の卒業で、スミス師らの中国伝道調査後、最初に派遣された3名の宣教師の1名として、寧波に定住した。ラッセル師は、在中伝道20年を経

て1867年（慶応3年）に、中国伝道総書記に任ぜられ、中国における主教の行使権を除く全権を委任され、次いで1872年（明治5年）、最初の北部中国主教に昇叙された。同師の訪日は、エンソー師の長崎上陸後、間もない1869年（明治2年）5月21日であった。長崎においてはエンソー師宅に3週間の滞在後、神戸、横浜、東京を訪れて7月15日帰任している。ラッセル師は長文の報告書をC・M・S本部へ送附したが、これによってC・M・S日本伝道の方針が決定されたと言っても過言でないほど重要なものであった。その報告を要約すると、

1. 日本におけるキリスト教伝道には大きな希望をいだくことができる。目下キリスト教は禁制されているが、この禁制は遠からず除去されるであろう。昨今、日本人はヨーロッパの服装を身につけているが、これと同様に少くともキリスト教の外形だけは遠からず採用することであろう。明治新政府の高官たちは、日本憲法を討議しているが、信仰の自由が議題となっているとのことである。
2. エンソー師が定住している長崎は、政情の不安な日本では、最も安全な居住地である。今後、日本の各地に伝道の門戸が開かれる場合も、C・M・Sは永く長崎を伝道基地(mission station)として保有すべきである。
3. C・M・S本部は長崎に土地を購入し、宣教師館を新築して宣教師を居住せしむべきである。エンソー師の住宅は、ウィリアムズ主教の所有で、年額120ポンドの家賃を支払っている。このバンガロー風の家屋は、建物は小さく、家賃は高すぎる。この家屋の道路をへだてた向側に空地があるので、この土地を購入して宣教師館を建築するならば、予算は3,000ドルで充分と思われる。
4. 日本の政治状況の変化に伴い、神戸または大阪へ進出すべきで、長崎には新に宣教師を送るべきである。
5. 神戸は一両年前から新しく外国人居留地が開設されたが、その商業上の重要さは急速に進展し、遠からず上海をしのぐ貿易港となるであろう。大阪は日本第2の大都会で、日本全国の商業と生産の中心地であり、最も多くの金持階級が居住している。将来、大阪はC・S・Mの最大な伝道基地となることは疑いない。目下、ウィリアムズ主教は大阪に1年のうち、数カ月を居住しているが、同主教の今後の動静はわれわれC・M・Sによい指標を与えることと思う。
6. 目下、中国在住宣教師間の問題は、病気に犯された場合の療養所の問題がある。この点に関して神戸は療養所に最適の土地と考える。神戸においてはヨーロッパ人によるホテル建築が施行されているが、その



ホテル料金は格安と聞いている。かかるホテルを病後の静養所に用うることは中国における療養所問題を解決する一つの途ではないかと思う。7. 横浜は英本国と同様に安全で楽しく居住ができる貿易港である。しかし外国人の悪徳行為に、土地の日本人は眉をひそめているので、中国伝道に経験の深い老練な宣教師を派遣すべきであろう。8. 日本は間もなくキリスト教伝道の門戸を開放するであろう。C・M・Sはこの禁教の時代に日本へ次々と宣教師を送り、日本語を習得せしめ、且つ次代の日本を背負う青年に英語を教え、他日を待機すべきである。日本政府の大学では、米国宣教師フルベッキ師は英語学を講じ、英国人技師ハーディ氏は工学を教授している。これらは政治、経済の見地のみでなく、伝道的見地からも有益な手段と思考される”と述べている。<sup>(註11)</sup> C・M・S日本伝道を回想するとき、ラッセル師のこの報告と意見が如何に今後の日本伝道に影響したかを知り、思い半ばに過ぐるものがある。

第四回目は中国第4代の主教、香港のバードン師 (Rt. Rev J. S. Burdon) であるが、同師はプール主教の来日まで、直接、日本伝道の管轄主教であった。これは次期の時代に属する。

## C・M・S と琉球海軍伝道会

ユーヂン・ストックがその「C・M・S伝道史」において“中国に福音の途を開いたのは戦争であった。ニュージーランドはキリスト教宣教師が途を開き、英国よりの移民と軍隊はこれに従った。中国は軍隊が途を開き、宣教師はこれに従った”と記しているが、まさに然りである。阿片戦争に敗れた清国政府は1842年南京条約を結び、さらに翌年の追加条約によって、香港を英国に割譲し、広東、厦門、福州、寧波、上海の5港を開港し、さらに外国人には居住権と通商権と治外法権を承認することになった。阿片戦争の是非曲直は論ずるまでもなく、英仏の恐喝主義である。ただキリスト教伝道史の見地からみて意義あることは、この戦争に参加した英国の海軍将兵によって、日本の領土ともいべき琉球にキリスト教宣教師が送られたことである。当時の琉球は中山王国として薩摩藩の保護領ではあったが、半独立国であった。当時、日本は固く鎖国の扉を閉していたので、まず琉球を足場として、日本入国の機を窺うことを考えたのは、さきにギョツラフ師があり、さらに阿片戦争後は英国東洋艦隊

に所属する英国海軍将兵たちであった。彼らの琉球伝道の目的は、琉球でキリスト教徒となった琉球人を日本へ送り、日本に福音を伝えようとしたのであった。琉球に上陸する機会があった英国海軍士官クリフォード中尉(Clifford)とその同僚の将校たちは、帰国後1843年(天保14) C・M・S本部を訪れ、琉球へ宣教師1名の派遣方を申し出た。<sup>(注12)</sup>この請願を受けたC・M・S本部は、創立後40数年を経たのち、伝道戦線の拡大よりも一時縮少を考えたおりで、宣教師の新規採用もその数を半減した時期であった。若しも極東に宣教師を派遣する場合は、先づ中国に送るべきであるというのが本部の意考であって、彼らの請願は拒否されることになった。海軍将校たちはこの拒絶に挫けず、直ちに琉球海軍伝道会(The Loochoo Naval Mission)を組織し、自らの手で伝道資金を集め、宣教師を送る準備を始めた。1845年、琉球海軍伝道会はベッテルハイム博士(Dr. Bernard J. Bettelheim)を選び、同会の宣教師として琉球へ送ることにした。ベッテルハイム博士はユダヤ系のハンガリー人で、キリスト教改宗者であり、その夫人は英国人で、彼も英国に国籍を有する医師であった。1845年(弘化2年)9月英国を出立し、途中香港でギュツラフ師らに迎えられ、しばらく同地のパーカー医師のもとに滞在し、次いで妻子を伴って英国軍艦に乗船し、琉球の那覇に上陸したのは翌46年(弘化3年)5月であった。ベッテルハイム博士は琉球官憲の言語を絶する迫害にもめげず、在島8年にわたる琉球伝道は同博士の著名なベッテルハイム訳新約聖書数巻を刊行したが、これについては多くの研究がなされているので省略する。丸善より翻刻された「The Chinese Repository」第19巻には同博士の長文な琉球伝道報告が、細字で約70頁にわたって掲載されている。<sup>(注13)</sup>また同博士の伝道については「植村正久とその時代」の第4巻にも、詳細に記されているので省略したい。<sup>(注14)</sup>但しC・M・S伝道史においては、スミス主教とベッテルハイム博士との交渉を閑却することはできない。

そもそも琉球海軍伝道会は、前述の如く、C・M・Sがなすべくしてなしえなかった働きを引き受けたもので、スミス師は主教就任以来、ベッテルハイム博士の伝道については念頭を離れなかったことであろう。ベッテルハイム博士はその長男の洗礼名にギュツラフを与えているが、今や香港政庁並びに在支英国公使館の高官(Chinese Secretary)の地位にあるギュツラフ師はスミス主教に助言もしたことであろう。スミス主教は、琉球にあるベッテルハイム博士の、

言語に絶する伝道上の苦戦を仄聞して、主教聖別の翌年、同地を巡回し、親しくその実状を視察し、将来の伝道計画も樹立することにした。英機帆船「レイナード」号（船長はクラックロフト氏）に乗船して、1850年10月3日、那覇に到着した。同主教がレイナード号を選んだ理由は、同船の船長クラックロフト氏は琉球政府の高官と親交があったためである。同船長は数回に亘って琉球政府の役人と会見し、ベッテルハイム博士は英国国民であるので、琉球政府がこんども組織的な迫害や、日常生活を困惑せしめるが如き圧迫を加えて、同地より退去を余儀なくする計画であるならば、英本国政府を代表する香港政庁は、甚だしく不満である旨を伝えた。この英国政府の動きにより、ベッテルハイム博士の個人的地位は著しく改善され、生命の危険に瀕していた家族は、生命を支えるに必要な物資入手することが出来るようになった。<sup>(注15)</sup>

ベッテルハイム博士の8年間に亘る琉球伝道の成果は、4名の受洗者と、聖書の琉球訳であった。1851年までには4福音書を訳し、その後1854年に同地を退去するまでに使徒行伝、ロマ書を訳し、さらに路加伝福音書には漢訳に琉球訳を附したものを作成した。スミス主教はこれらの琉球訳の出版と弘布には少なからぬ尽力をなした。1855年（安政2年）に「路加伝福音書」「約翰伝福音書」「聖差言行録」「保羅寄羅馬人書」が香港において出版され、次いで漢和对訳の「路加伝福音書」<sup>(注16)</sup>は1858年（安政5年）に出版された。この出版に関連して、ダーロウ並びにモール共著「印刷された聖書の歴史的目録」<sup>(注17)</sup>によると、この安政2年版は“キリスト教知識普及協会（S・P・C・K）の求めにより、香港ビクトリヤ教区スミス主教が、琉球海軍伝道会の経費によって、1855年（安政2年）香港において路加、約翰、使徒行伝、羅馬書を、刊行した”とあり、安政5年版は“1858年（安政5年）に大英聖書協会の香港駐在通信委員会が、漢訳の本文（これは中国代表委員訳）を行間に挿入した琉球訳を500部出版した”と記している。スミス主教はこのベッテルハイム訳の出版に尽力をされたのみでなく、さらにこの訳が適当な日本訳ならば、これを日本人間に弘布しようと考えて、日本訪問に際しては安政5年版を携行している。スミス主教はこの日本訪問の見聞を手記して「日本滞在10週間」と題して出版した。<sup>(注18)</sup>これは1860年（万延元年）4月初旬長崎に上陸し、同地に滞在してのち神奈川に向い、さらに江戸に赴き、6月の始めには江戸を出て、再び神奈川に滞在し、次

いで函館へ旅行し、そこより桑港に向ったという滞日10週間の旅行記である。このうちにベッテルハイム訳にふれて、“自分は数年前に刊行した路加伝福音書（これは安政5年版を指す。筆者）を100冊日本に携えてきた。この目的は適当な日本語学者によって、訳文の調子、慣用語の用い方についての評判をたしかめ、さらに日本人間に配布する可能性について実際に試みるためであった。”と記し、日本人間に配布する可能性については“甚だ遺憾であるが、今日、日本在住の全新教宣教師は、現在の日本政府の態度では、聖書の配布は極めて無作法で不得策であるとの意見の一致を報ぜざるをえない”としており、訳文の評価については“自分が携行してきた漢訳並記の日本訳路加伝は、100冊のうち一部は長崎のウィリアムズ、フルベッキの間に頒け、残部は神奈川のブラウン、ヘボン、ゴープル、シモンズらに留めおくように決めている。これらの人々は慎重に頒布の機会を待ち、多分そのうちに訳文の価値について報告をよこすであろう”と記している。なお諸宣教師の報告に関しては、前掲のDarlow and Mouleの著書のうちに、“この版（1858年版を指す）の若干数は日本にある宣教師のもとに送られたが、彼らはこの訳は日本本土に普及するに適しないことを発見した”旨が附記されている。

琉球第2代の宣教師モーアトン師は、元来ロンドン・シテイ・伝道会に属していたが、ベッテルハイム博士の後任として、スミス主教より英国国教会の聖職に按手されて、琉球に赴いた。1854年1月、那覇に上陸したが、健康がすぐれず、病臥することが多かったので、翌年10月、琉球を去り、濠州に赴いた。同師は生涯、濠州聖公会の牧師として送り、晩年はシドニー大聖堂のキャノンに挙げられた。かくして英国々教会系の琉球伝道は中絶したが、同伝道会の残金654ポンドはC・M・Sに献金されて、将来の日本伝道のために用いられることになった。

## エンソー・バーンサイド両師の閲歴



REV. G. ENSOR.

ジョージ・エンソー師の閲歴に関する資料は、C・M・S宣教師登録簿(C. M. S. Register of Missionaries.)である。その第709号に同師の履歴が記載されている。

Ensor, George. — Age 25. Queen's College, Cambridge (Scholar). 1867, B. A., and 1877, M. A. 1867, June 16, **D.** and 1868, June 7, **P.** by Bp of London. 1868, July 28, to Japan; 1872, May 14, invalided to England, and resigned. Service, 4 years.

1st Missionary of the Church of England to Japan. 1872—74, **C.** of Aston-Hamville with Burbage; 1875, Association Secretary for Essex and Suffolk; 1878, **V.** of Rendham, Suffolk. **M.** 1868, Elizabeth Wilkins.

以上が登録簿記載の同師の履歴に関するすべてであるが、少しく他の資料によって補いたい。先づ師の生年月日である。これは履歴書に25歳とあるが、25歳は宣教師として海外伝道に出立した当時の年齢である。1868年7月に英国を船出しているのだから、これを逆算すると1842年、または1843年と推定することができる。履歴書には出身地が記されるのが常態であるが、同師のは欠けている。

師の出身地はアイルランドで生粋のアイルランド人であった。<sup>(注19)</sup> エンソー師は海外伝道の召命をいつ受けたかということについては、筆者は「日本聖公会百年史」に記してある歴史編纂委員会の記事には賛同ができない。<sup>(注20)</sup> 筆者の推測はエンソー師が、ケンブリッジ大学に在学中に受けた感化が、召命に応じて決意されたと考える。リビングストンが長期に亘るアフリカの旅を了えて英国に帰り牛津、劍橋の大学生に訴えた、かの有名な言葉が、まだ学生の中に語られていたであろう時代であった。リビングストンは訴えた。“I go back to Africa to try to make an open path for Christianity. Do you carry out the work which I have begun. I leave it with you.”この言葉に動かされ多くの大学卒が或は宣教師、或は行政官、或は貿易商として暗黒のアフリカに渡った

のであった。ケンブリッジ大学は由来、多く伝道者を海外へ送った。同大学はエンソー師までに<sup>(註21)</sup>57名の先輩を C・M・S 宣教師として海外伝道に献身せしめ、1900年までに<sup>(註22)</sup>241名の劍橋大卒が C・M・S のために献身したという伝道精神の横溢した大学である。師はかかる大学で学んだのであった。さらに当時、ケンブリッジ市には、Jesus Lane Sunday School という著名な日曜学校があった。エンソー師は学生時代にこの日曜学校教師として奉仕した。ここの教師中、19世紀の後半だけでも72名の C・M・S 宣教師を輩出し、中国のモール主教、マダカスカルのロイストン主教、印度のスピーチレイ主教らはいずれれもその先輩であった。当時、ケンブリッジ大学に溢れていた伝道精神が、同師を宣教師として献身せしめたと筆者は推測するのである。次に何故にエンソー師が日本最初の C・M・S 宣教師として選ばれたかという問題がある。C・M・S 伝道史によると、同師は1867年度の中国伝道に派遣が予定されていた4名の宣教師の1名であった。よって大学の卒業とともに直ちにロンドン主教によって1867年6月に執事に按手され、7月には英国出発の日程まで決定し、友人知人に別れの挨拶をおえた直後に、C・M・S 本部より延期の指令が届き、越えて9月には中国派遣の4名は出立中止を命ぜられた。これは C・M・S 創立50年祭ののち、伝道資金に欠乏を生じ、新規の開拓伝道が不可能となったので、中国伝道の宣教師の新規採用は中止となったのである。この1867年は印度へ8名、アフリカへ2名、西北部カナダへ2名と計12名の宣教師が、従来からの伝道地へ交替に送られたのみであった。

かかるうちに日本は各国の予期通り、明治維新がすすみ、一応政情も安定するかに思われたので、C・M・S 本部は、既に捧げられた日本開教伝道基金4,000ポンドを中心に伝道開始の詳細につき協議を重ね、遂に開教を決議したのであった。この時、待機中のエンソー師が、日本最初の英国宣教師として選に入ったのである。かくして1868年7月、英国を出立し、途中、中国寧波に滞在して、先輩諸宣教師の指導を受け、1869年1月23日、長崎に上陸したのであった。これを和暦に換算すると、明治元年12月11日に当たるのである。

エンソー師の伝道は長崎にかぎられていたが、短期間であったが、北海道の函館にも滞在した。明治4年の夏季中、3カ月間同地に滞留し、英国宣教師として始めて福音の種子を、函館に蒔かれたと思われる記事もある。1871年5月

(和暦の明治4年3月11日が、大陽暦の5月1日に該当す)に燈台船に乗船して長崎を出帆し、途中、鹿児島に一泊して、横浜へ向い、横浜と東京に3週間滞在して、同地の宣教師らと親交を温め、次いで函館に向い同地の英国領事ユースデン氏の好意により、同領事館に3カ月間滞留して長崎に帰任している。<sup>(注23)</sup>

エンソー師は、3年有半の日本伝道ののち、1872年(明治5年)5月14日長崎を出帆して帰国の途についた。この帰国の原因は、履歴書には“病弱のため”とあり、C・M・S伝道史やC・M・S Intelligencerは“彼は日本の特異な気候に耐えられなかった”“彼は滞日中、身体を害し、昨1872年、帰英した”と記されている。なお同師の長崎伝道中、その身边をスパイした謀者、山村三郎は“<sup>(注24)</sup>歯痛を治療するため帰国した”と報告しているが、禁教時代の不断の心労と過労が、同師の健康を害し止むをえず帰国したことと思う。

帰国後のエンソー師は、時にはC・M・S連絡主事として英国各地の教会を廻って日本伝道の実状を語り、また永く国教会の牧師として忠実に牧会の務めを果たした。さらに生涯の最後は再び自給宣教師として訪日している。1909年(明治42年)師は息女E・V・エンソー嬢を伴い、始めは小石川の指ヶ谷町に、次いで麻布の霞町に居住された。自宅を講義所として開放し、聖書研究会を開いて青年男女を集めた。個人伝道では罪、悔改、救いの教えのみを語り、この外に教えなしとして熱心に説かれた。その熱情は辻に客を待つ人力車夫に福音を説くという有様で、徹底的に福音主義と聖書至上主義を厳守した伝道者であった。翌1910年初夏、顔面に疔をわづらい、息女を残して、1人帰英された。船中において病状が悪化し、船がジブラルタル港に停泊中に逝去されたのである。ユージン・ストックはそのC・M・S伝道史の日本伝道の部の最後に、“筆者はジョージ・エンソー師の死を伝えずにペンを擱くことは出来ない。師はC・M・Sと英国々教会より日本に派遣された最初の宣教師であった。特異な日本の気候に耐え難く、病魔に犯され、4年の働きののちに帰英したが、その後ながく英国に於て牧会伝道に従事し、1909年には、令嬢を同伴して、再び愛する日本に主キリストを宣べ伝える使命で赴いた。翌年、帰国の途次、ジブラルタルで逝去された。師は弁舌においても、文筆においても秀れた人物であった。師の最後の寄稿は1910年7月号のグリーナー誌に載せられている”と記している。

南東京教区主教セシル・ボーフラワー師は、C・M・S本部へ弔辞を寄せて、エンソー師の12カ月に亘る働きを愛情深く偲び、“それは最も美しい追憶の1年であった。われわれには美しい幻が示され、彼には理想的な働きの最後の歳であった”と述べている。日本伝道の創立者は、豊かな知性と燃ゆる霊性と伝えずば止まずの使命感の持主であった。日本が要求する伝道者にかかる人物ではあるまいか”と追悼している。<sup>(註25)</sup>

バーンサイド師の履歴はC・M・S宣教師登録簿によると、第726号に登録され、下記の如くである。

Burnside, Henderson. — Age 27, of Blackheath, Kent. 1866, at C. M. College. 1869, May 23, **D.** by Bp. of London; 1871, April 30, **P.** by Bp. of Victoria, Hong Kong. 1870, Jan. 1, to Nagasaki, Japan; 2nd C. M. S. Missionary to Japan. 1875, instrumental in building first church for converts of the Church of England in Japan; 1875, April 17, to England. 1876, Feb. 8, withdrew. Service, 6 years. 1875—76, **C-in-charge** of Littelton, Middlesex; afterward **V.** of St. Saviour's, Forest Gate. **M.** 1869, Dec. 2, Clara Louisa Law.

ここにある27歳という年齢は、これも同師が宣教師として英国を出立したときの年齢なので、その生年は1843年と推定される。筆者は師がブラックヒース出身であることが、師をC・M・S宣教師として献身させた理由と推測する。バーンサイド師がその少年時代と青年時代を過したブラックヒース教会の牧師はJ・フエン師で、C・M・S宣教師として印度に伝道し、また同師の子息で、のちにC・M・S総主事に就任したC・C・フエン師は、バーンサイド師の青年時代には印度に伝道中であった。加うるに中国香港の初代主教スミス師は、帰英後はここに隠棲されていたのであった。かかる背景が師をして中国伝道を決意せしめたのではないかと想像される。C. M. College卒業後、バーンサイド師も始めは日本伝道の要員ではなかった。中国伝道のため寧波に向ったのであった。出発の前、アフリカ、インド、中国へ派遣される10名の若い宣教師達に、その頃C・M・S総主事の職にあったC・C・フエン師が壮行の辞を述べて激励しているが、その言葉のうちに“エルウィン、バーンサイド、パルマーの3兄弟



よ。兄らは中国の寧波に伝道することを指示する。既に同地に定住するラッセル、ガフ、モールの諸先輩に合流して、その指導を受けよ。……但し兄らのうちの1名は、目下深い関心をもたれている日本伝道の前進のために、その光栄ある任務を担うやも知れない。日本伝道のためには、中国文字の理解は欠くべからざるものであり、中国の思考や中国の宗教は、日本人に与えている影響は(注26)実に深い。先づ寧波にあって日本伝道の準備をされたい”と述べている。出身校の C. M. College とはロンドンのイズリングトン地区にあった Church Missionary College で、C・M・Sが海外に派遣する宣教師を養成した神学校であった。(注27)6年間の長崎における日本開拓伝道のち帰英し、永く牧会に従事し、1903年に逝去した。師の令嬢で長崎生まれの Clara Law Burnside 嬢は、父君の志をついで婦人宣教師として来朝し、1897年以来、九州教区の長崎、福岡、小倉等で伝道に従事した。

## エンソー・バーンサイド両師の長崎伝道

日本開教伝道のため、先づエンソー師、次いでバーンサイド師を送ったC・M・Sは、前述の如く異教徒の靈魂の救いを目的とした伝道団体であった。主キリストの御命令により、主の証人として福音を宣教し、救われた者をキリストの靈なる身体、則ち教会の肢たらしめる。そしてこの教会は現世より来世にわたって永続するという靈的原則は、C・M・S創立当初からの伝道方針であった。この方針をたいして来日したエンソー師の長崎上陸当時の心境と極初の伝道状況が「C・M・S伝道史」に載せられているが、これが抄訳されて「日本聖公会百年史」にあるのでそれをご覧いただき、筆者は幕末明初の禁制時代に活動した新教諸宣教師の伝道の結果を比較してエンソー師の感化力がいかに尋常ではなかったことを示したい。フルベッキ師は夙に“エンソー師は多くの日本人の訪問をうけ、そのうちの10名内至は12名を授洗する光栄をえた”と記しているが、小沢三郎氏は幕末明初の禁教時代に於て、更に日本基督公会創立以前に受洗し、しかも日本内地で受洗した氏名を公表されたが、その研究を引用させていただき、これを授洗者宣教師別に分類してみよう。(注28)ここに受洗者名とその年度を記す。(注29)

### I) J・H・バラ師の授洗

- |                    |        |
|--------------------|--------|
| 1. 矢野元隆            | 元治元年   |
| 2. 栗津桂二郎           | 明治元年   |
| 3. 鈴木貫一            | 同 上    |
| II) C・M・ウイリアムズ師の授洗 |        |
| 1. 庄村助右衛門          | 慶応2年   |
| III) C・H・フルベッキ師の授洗 |        |
| 1. 村田若狭守政矩         | 慶応2年   |
| 2. 綾部 恭            | 同 上    |
| 3. 清水宮内            | 明治元年   |
| IV) D・タムソン師の授洗     |        |
| 1. 小川義彦            | 明治2年   |
| 2. 鈴木鉦二郎           | 同 上    |
| 3. 鳥居だい            | 同 上    |
| V) G・エンソー師の授洗      |        |
| * 1. 二川一騰          | 明治2年   |
| 2. 不明 (エンソー師下女)    | 明治2～3年 |
| * 3. 松本喜一郎         | 同 上    |
| * 4. 白石敬蔵          | 同 上    |
| * 5. 竹本佐八 (コック)    | 同 上    |
| * 6. 竹本わか (女中)     | 同 上    |
| * 7. (不明) 種吉 (少年)  | 同 上    |
| * 8. 山本帆三          | 同 上    |
| 9. 仁村守三            | 明治3年   |
| 10. 中沢一治           | 同 上    |

上掲のリストによると20名の受洗者中、エンソー師は10名に洗礼を授けた。兎にも角にもキリスト教の弾圧のきびしかった幕末明初の時代に、10名に洗礼を施した同師は、C・M・S最初の日本宣教師として恥しからぬ伝道者であり、宣教のチャレンジャーであったことを認めずにはおられない。

ここで取り上げたいのは、エンソー師が授洗した二川一騰である。後述するように、二川はエンソー師の著書の校訂者であり、その印刷者でもあった。二

川は明治初年のキリスト教の歴史を物語る人物であり、各教派を転々とした素朴な信仰の持主であったが、生涯キリスト教の信仰を守った不思議な人物である。彼は自伝「小島一騰一代記」<sup>(注30)</sup>を記したり、回想を口述したりしてその生涯を伝えているが、二川の生涯に関する精緻な研究は、小沢三郎氏によってなされ「二川一騰（小島）の受難とその後のあゆみ」と題して発表されている。筆者が記したいのは、二川一騰に関する英国側の資料である。そして特に二川の受難の年月日についての相違点を提起したいのである。「小島一騰一代記」によると「明治3年3月15日午後8時ころ私は湯にゆき、湯屋から表に出ると……捕手8人が私をずっと取り巻いて役所につれてゆき」とあり、小沢氏は「小島一騰翁回想録」や「二川一騰氏繫獄始末」を資料として、明治3年（1870年）3月15日に長崎で結婚し、翌日（15日説もある）捕縛されたとしている。その釈放の年月日については、「二川は5年8月出獄いたしましたといっており、前島潔氏は同年（注明治5）8月再び福岡に護送されて同地において釈放されたといっている。しかし太政類典その他によると、明治6年（1873）釈放とも考えられるので、この点疑いを残しておく」と小沢氏は断言を保留している<sup>(注31)</sup>。これらはいずれも日本側の資料によるものである。さて英国側の資料は二川の捕縛、釈放について如何に語っているかという点、二川の捕縛に関するエンソー師の手紙はみあたらないが、バーンサイド師の手紙は二川に関する報告がなされている。C・M・S宣教師は毎年一回、年度末伝道報告書を提出する義務があった。この年度末伝道報告書は、ただに伝道資料のみならず当時のわが国の社会、政治、文教その他について知る貴重な資料でもある。二川に関する同師の年度末報告は次の通りである<sup>(注32)</sup>。

「私共は失望させられるよりも、さらに多くの喜びがありますので神に感謝します。親愛なる日本人、二川一騰はエンソー師より受洗した信徒であります。彼は約2年半の以前、当市のある路上で捕縛され、獄に投ぜられました。捕縛の理由は大小両刀を帯びているという法律違反でありましたが、真の理由はキリスト教を大胆に信奉したということでありました。これは現在は無条件で自由に信奉できます。彼の捕縛の当時、エンソー師は函館に旅行されていまして、私が長崎領事の指導をうけ、彼の釈放に努力しましたが無駄でした。役人達の狡猾と彼に適用された罪状の無実なことの立証に困難がありまし

て、彼は2年半の間、主キリストの十字架を負うべく強要されました。……(後略)”このバーンサイド師の報告書は1873年(明治6年)12月2日附で長崎より発信された、明治6年度の伝道報告書である。このうちで二川の捕縛の年月を知る鍵は、エンソー師が函館に旅行中であったという一句である。エンソー師がいつ函館に旅行したかという、同師の1871年(明治4年)度の伝道報告書が12月15日附で発信されているが、そのうちに5月に長崎を出立して、途中鹿児島、横浜、江戸を訪れて函館に着、同地に3カ月滞在して8月に長崎に帰任した記事がある。二川の捕縛に関する日本側の資料は、明治3年3月15日か16日であるが、これを明治4年と読みかえて、和暦の明治4年3月15日、または16日は、大陽暦に換算すると、明治4年5月5日、または6日に該当する。丁度この時は前記の如くエンソー師は函館へ向って旅行中であり、代ってバーンサイド師が釈放運動を試み、長崎領事エ・エ・エンネスリーより宮川権知事宛の書翰“二川一騰の件”の日附も明治4年6月14日付であることも頷ける。二川は明治4年3月に捕縛され、在獄期間は2年半説を取り上げると、その釈放は明治6年8月となる。さらにこれを確認する資料としては、バーンサイド師の1872年(明治5年)度の年度伝道報告書には、二川一騰の釈放記事は何ら記載されていないので、筆者は、二川一騰の捕縛は明治4年3月で、その釈放は明治6年8月と推定するものである。先学諸賢のご批判をいただきたい。

エンソー師の伝道については、これを省略したが、病気で帰英後、各地に招かれて、日本伝道に関する講話したが、それによると、禁教時代の長崎では、集会は常に暮夜に行ない、家の入口は全て鍵を下し、窓は全部閉ちて、聖歌はうたわず、詩篇も読まず、声をひそめて少数の求道者に神の言を語ったと当時を回顧して師の日本伝道を紹介している。明治5年5月、エンソー師が病のため帰英後は、バーンサイド師ひとり残って孤軍奮闘したが、明治6年2月、切支丹禁制の高札撤廃とともに、伝道の様相も一変した。同師が1873年(明治6年)12月2日付の伝道報告書によると、“公然と集会在日中に守られ、11月より毎朝3名の受洗した信徒のために、バイブルクラスを開いている。このバイブルクラスでは、創成記(筆者注、明治6年にD・タムソン氏の創成記の試訳がある。)と約翰伝(筆者注、ヘボン・ブラウン訳の‘新約聖書約翰伝’が明治6年に刊行された。)を隔日に読んでいる。明治5年度のバイブル・クラス

は馬可伝の研究が唯一の方法であった。去る11月以来主日の午後、公禱を守っている。礼拝の順序は 1. 聖歌をうたう。2. 創成記朗読（これは現在日本語に訳されている唯一の旧約聖書と同師は注を加えている。） 3. リタニー（筆者注、朝晩禱、附リタニーの刊行は、明治10年に出版されているが、リタニーの和訳は早くよりなされており、その写本を用いたと思う。） 4. 聖歌 5. 新約聖書朗読、（同師は邦訳の福音書を使用していると注している） 6. 説教。7. 祝禱の式順であると記して、なお会衆は第1回の主日には8名、第2回は11名、第3回には22名と報告している。さらに日本人市街地にも借家して、伝道や公禱を行ないたいが、借家の入手ができない。これは家主が日本政府を恐れるのではなく、むしろ無智な群衆を恐れているようである。外国人に家屋を貸すことはその家屋が破壊される危険があるからである。禁制の高札が撤去されてのちは、日本人が昼間に公然と師の住居を訪問するようになったが、真剣な求道者は少ない。或は好奇心で、或は暇つぶしの訪問で、殊に俸禄を失った武士の子弟が、英語の学習のため、或は召使としての職を求めて来訪する者が殆んどであった。従来は自宅に来訪者を待機するのみであったが、師はこの年から街頭にも進出して、始めて寺院の山門で、数10分に亘り路傍説教を試みる新しい経験もえた。この1年の受洗者は僅かに2名で、1名は余儀なく江戸へ去り、他の1名は政府の諜者であったことがその後判明し、伝道者の無力と寂寞を切に感じ、主の約束を期待して伝道への精進をさらに強く決心している<sup>(註33)</sup>と報告しているのであった。

バーンサイド師はその伝道補助者として、水科五郎をえた。同氏は後年、北海道の釧路へ伝道師として赴任したが、暴風雪の夜、伝道集会の帰途、殉難している。バーンサイド師は長崎の信徒のため、教会堂建築を計画した。長崎の市街地は、講義所のための借家も不可能であったので、教会堂の建築は思いもよらぬことであった。そこで外人居留地である出島の中で、市街に出入する橋のたもとに土地を確保した。この土地に小さな会堂の建築に着手したが、師は病魔に犯され、その落成をみずに帰英の止むなきにいたり、明治8年4月17日、長崎をあとにした。この建築の完成のため、大阪のエビントン師が、しばし長崎に滞留し、同8年7月11日、日本最初のC・M・C関係教会の献堂式が挙行された。バーンサイド師の後任者、モンドレル師 (Rev. H. Maundrell)

も献堂式の数日前に英国より着任、この喜びをともにしたのであった。<sup>(注34)</sup>

## エンソー師とその著書

ユーヂン・ストックはそのC・M・S伝道史に、次の言葉を記している。

“He was quite a brilliant advocate of the cause by both voice and pen. His last contribution appeared in the Gleaner in July, 1910, when he described in a very touching way the conversion of two Japanese girls.”

かくの如く師は、文筆のたつ宣教師であったが、師の文筆活動は、従来、わが国において何ら報ぜられることがなかった。C・M・S編 The Centenary Volume of C.M.S. のうちにエンソー師の著作として

Wrote “Contributions to the Gospel” “Help those Women” “Night on the Nyanza” “Criticism of Destruction”

JAPANESE: Wrote “Akuno Dai Biyo” “Shinto Sōran” (the first two Christian books printed in Japan in modern times.)

が記録されている。同師の英文著書はともあれ、日本文の著作がありとすれば、わが国の新教キリスト教史上、貴重な文献である。エンソー師の来日が明治元年末で、その長崎退去が明治5年5月とすると、その間わが国で地下にくぐって刊行された新教関係のキリスト教書籍は“真理易知”“三要文”の外に幾種類があったろうか。同師の著書“Akuno Dai Biyo”(悪の大廟(?)筆者の当字)“Shinto Sōran”(神道総覧(?)同上)は、その題目からみて神道に対するキリスト教の弁証論と推考される。筆者はかつてC・M・S本部に上記2冊の所蔵の有無について問合せたところ、その所蔵はない旨の回答があった。しかるに昭和38年の夏、偶然、吉田寅氏によって「神道謬弁」という表書のある14葉の写本が発見された。同氏はその第1葉にある書名「神道破斥」を題名として研究論文を公表された。この論文には「神道破斥」の写本の複製版の挿入があって、まことに親切な業績である。<sup>(注35)</sup>その解題を引用すると、「“神道破斥”なる書名は、第1葉の冒頭にあり、その下に、著者“英国教師一空”校者“二川一騰”の記名がある。本写本は、九州日田県の官用罫紙に毛筆でかかれており、全部で14葉で表紙には辛未(明治4年)6月3日写の日付けと筆写者高永成章の署名および“神道謬弁”なる別の表題が付されている。“神道謬弁”は

“神道弁謬”の写し誤まりと思われる」と記している。これでこの写本の輪郭を大体捉えることができると思うが、この原刊本が果してエンソー師の著作であったかどうかを考究してみたい。

先づ表紙である。表紙には表題の“神道謬弁”と筆写年月日の“辛未6月3日”と筆写者の署名がある。この表題については“神道弁謬”の誤写と思われるとして史料を明示してあるので、その通りであろう。次に第1葉の表題“神道破斥”とあり、著者については“英国教師一空著”とあり、校訂者としては筑前二川一騰校と記されている。この写本の表題が、“神道弁謬”と“神道破斥”と二通り記されていることである。この表題の異っていることについては、解題者も未だこの間の事情を明かにしないと説明している。筆写年月日は明治4年6月3日写は何らの問題はないが、筆写者の署名である。吉田氏は高永成章と読まれているが、筆者はこの署名がどうも高取成章とも読めるのである。且つ写本の用紙が日田県の官用罫紙であるので、日田市の古老について調査した。その結果、高取成章が実在の人物であったことを確めた。高取成章は日田の寺院出身で、日田県設置に際して出仕して県庁官吏となり、日田県が廃止とともに生家に帰り、住職として生涯を送った。同氏の人物は田舎には珍しく新しいものを愛好し、早くも明初において西洋の文化、思想を勉学した進歩的な人物であったということである。また同氏の令弟は大分県下で最初の弁護士を勤めた著名人であった。高取成章の子孫は引きつづき住職を勤めているが、先年、寺院の修理に際して古書類を全部整理したようで、古いものは現在何も残っていないという話であった。これで日田県官用罫紙を用いて写本した理由が頷ける。次に表題である。エンソー師が自ら自分の著書としてC・M・S本部に報告しているのは、上述の2冊の日本語著作であるが、そのうち、この写本の表題と発音の似ているのは、“Shinto Sōran”である。この“Shinto Sōran”と“神道破斥”または“神道弁謬”の関係については、原刊本が発見されぬ限り確言はできない。さらに問題となるのは“英国教師一空著”という著者名についてである。吉田氏はその解題で“著者エンソルGeorge Ensor(一空はその日本名)”と記しているが、少しく掘り下げてみたい。“英国教師”とは何を意味するかというと、これは今日の意味とはその内容が異っている。キリスト教用語としての教師の意味は、明治初年においては次のように用いられ

ている。著者及び刊行年月の未記載の明治初年のものに「信経問答」<sup>(注36)</sup>と題した木版の小冊子がある。そのうちに“誰が聖会の掌管や弁理人になるか。教師である。教師は何等あるか。三等ある。すなわち監督と会長と会吏とである”と記している。この「信経問答」の改訂版である「使徒信経問答」<sup>(注37)</sup>には、さらに明瞭に記されているが“誰をもって聖公会の<sup>つかさ</sup>掌管および<sup>とりあつかうひと</sup>事務を弁理人と為す乎。教師その職に任ず。教師の階級何等あり乎。三等あり。監督、会長、会吏是れ也。”と記している。これをもってみると、明治初年においては教師は、聖公会の聖職の意に用いている。その実例の一つとしては手元にある「天道溯原解」に、耶蘇隆世1875年（明治8年）第5月、北海道函館港住人英国教師デニング姓と署名したのがある。これで“英国教師”は英国々教会の聖職と解してよからう。次に“一空”である。エンソー師と一空が同一であるという確証を、他の史料によって挙げることは今のところ不可能であるが、傍証を挙げると明治4年に本邦に居住していた英国々教会の聖職は誰であったかという<sup>と</sup>エンソー師、バーンサイド師、横浜英国領事館チャプレン・ペーリー師であった。このうちペーリー師は横浜に在り、バーンサイド師は明治4年着任早々のことであれば、残るのはエンソー師のみである。そして校訂者二川一騰はエンソー師の日本語教師であり、二川一騰の前任日本語教師は、一道と号した清水宮内であったことなどから、両者の一をとって“一空”と漢字名で呼んだことは余り無理な想像ではないと思う。またエンソー師は、日本政府の諜者から常に“エンソル”と記されており、また長く長崎聖公会牧師の職にあった松岡安立司祭の証言も“同教会に伝承された古い受洗者名簿には、（これは原爆で焼失の由）はっきりエンソルと記されていた”と語っている。このエンソルと“一空”の訓読みの間に何か似た発音も感ぜられる。これらの状況から“英国教師一空”はエンソー師であったと断定しても間違いはないと思う。次に“神道破斥”の内容を分析して、その著者の神学傾向を解明したいと考えるのであるが、“神道破斥”の内容は、これを10項目に分けて、この写本の末尾に目次を附記している。この内容には目次による区切れや段落は示されていないが、文章を通読するときには、区切れは明白である。この書物は日本在来の神道に対するキリスト教の弁証論で、10項目の第1は“破親国”，第2は“破記事謬伝”，第3は“述三柱無始”，第4は“破二神非全智全能全善”，第5は“破



大皇神非日輪”第6は“破古事記非教人書”第7は“破日本古無神”で、これらはいづれも神道に対する論難を述べている。第8は“述国掟神掟”で第9は“示三種唯一神”の項目で、この項ではキリスト教を紹介して、キリスト教は国の掟に背くものでないこと、キリスト教の神は唯一の真の神、天地万物の創造者であることを提示している。第10は“述宗義”で、ここでキリスト教の教義を述べている。この“述宗義”の部分を抜萃すると次の如くである。

神ハ是世界ヲ創造シ玉ヒ、男一人女一人ヲ創リテ、清キ美々シキ花園ノ中ニ入レ置キ、則チ其花園ニ、万ノ草万ノ木ニ、花菓等ヲ、其二人ノ為ニ生ゼシメ玉ヒシ故ニ、何一モ不足ノ物ハナカリケリ、但シ如此ク草々ノ者ハ、万ノ人間ヲ深く憐ム 証拠ト立テテ、則御身ヲ躡シテ、我等ノ心ヲ断ヘズ悦バセ玉フナリ。但シ我等ノ先祖、二人ハ美シキ園ノ中ニ在リテ、常々神ヲ見奉リ、常ニ神ノ御声ヲ聞キテ居リケルニ、悪魔ヨリ惑サレテ、神ノ御掟ヲ破リ犯セシユヘ、其時諸ノ悪、二人ノ心ニ遁入テ、子孫ニ至迄、悪ヲ伝遷シテ、善ノ心ヲ失ヒシユヘ、此世彼世ニ限りナキ大ナル苦ヲ受ルナリ、但シ万国ノ人間ハ、尽ク其ノ二人ノ人ヨリ生レ出タルモノナレバ、悪ノ罰ヲ今ノ世マデ受伝ヘ居ルユヘ、人間ハ尽ク悪ノ心アルナリ、誠ノ神ハ、万ノ人間ヲ、皆地獄ノ火ノ中ニ送り遣スコトヲ、不憐ニ思召セドモ、御身ハ全善ニテ在スユヘ、悪デヨゴレタル人間ヲ天国ヘ迎ヘトルコトハ叶ハザルナリ、由テ耶蘇ヲ天ヨリ下シ玉ヒ、耶蘇ハ、即チ人ト生レ玉ヘドモ、天父ノ御子ニテ在スユヘ、少シモ悪ナク、唯善ノミノ御身ニ、万ノ人間ノ罪咎ヲ引受ケ、十字架ニ掛リ、死ニ玉ヒケル、即三日ノ後、蘇ソ（耶蘇ノ誤写ナラン）、再ビ天国ニ登リ、今ハ真ノ神ノ右ニ居在スナリ、但真ノ神ハ、人間ノ罪咎ヲ、御子耶蘇ノ上ニ置テ御身ノ全善ノ御掟ヲ破ズシテ、人々ノ罪咎ヲ許シ玉フ、聖書ニ神ハ子ヲ遣シ玉ヒ世ヲ愛シ玉ヒ、凡是ヲ信ズル者ハ亡ズシテ長キ寿ヲ授ル故ナリ、ト仰セラレタリ。

夫真ノ神ハ、耶蘇ヲ信ズル人ヘ、御聖霊ヲ授ケ玉フ、由テ諸ノ悪ノ思ヒ、悪ノ行ヲ止メテ、漸々ニ善ノ道ニアルトキ、遂ニ天国ニ登ル可キナリ、又耶蘇ヲ信ゼヌ人々ハ、身モ心モ改メズ、則チ悪ヲ思ヒ悪ヲ行ヒテ、悪道ヘアルクユヘ、畏シキ地獄ノ火ノ中ニ落テ、長キ苦ヲ受ルナリ、但シ耶蘇ハ再ヒ天ヨリ降り、万国ノ人間ヲ呼ビ集メ、善ト悪トノ裁判ナシ、善人ニハ善ノ報ヒ、悪人ニハ悪ノ報ヲ与ヘ玉フナリ、但シ誠ノ神ハ、御慈悲深く在スユヘ、御子耶蘇ヲ、

誠ニ信ジテ、己ノ罪ヲ懺悔スル徒ノ罪咎ヲ、則チ耶蘇ノ御血ヲ以テ洗ヒノゾケテ天国ニ迎ヘトリ玉フ、聖書ニ汝等ノ罪ハ、シウノ如クナレドモ、必ズ雪ノ如ク白クナルベシト仰セラレタリ、故ニ耶蘇ヲ信スル人々ハ、天ノ神ヨリ造リト造リシ罪ヲ許サレテ、御聖靈ヨリ、新キ心ヲ再ビ戴クユヘ、惡ノ心ヲ抑ヘテ、次第ニ善道ニ赴キ、遂ニ天国ニ登リ、誠ノ神ノ御許ニテ、永キ樂ヲ授ルベシ、但シ耶蘇ヲ信ゼヌ人ハ、日日惡ヲ思ヒ惡ヲ行ヒテ、惡道ニアルクユヘ、誠ノ神ヨリ、惡ノ報ヲ受ケテ地獄ノ燄ノ中デ、永キ苦シミヲ受ルナリ、是レ耶蘇ノ御教ノ略概如斯矣。

これをみると、著者が日本国民へ伝えようと念願したキリスト教の根本教義は、神は天地万物と人間を創造し給うたこと、人類の始祖による罪の始り、この罪は原罪として伝えられること、この罪は十字架により救われ、救われた者は聖霊を受けて善道を歩み、天国に登り神の許にあって永久の至福を受けること、これに反して耶蘇を信ぜぬ者は悪道を歩み、死後は地獄の焰の中で永劫の苦しみを受けるという教えが著者の伝えるキリスト教々義の要約ということになる。しからばエンソー師は、その在日、伝道中に如何なるキリスト教々義を教えたかという、1909年、再度渡来された折に、同師に学び、同師より受洗した中村老姉の回顧談を伺うことにする。老姉は語って、“私がエンソー先生から教えられたのは、罪、悔改め、十字架の救い、救われた者はただちに伝道せねばならぬということだけでした。先生は繰返えし繰返えし熱心に教えて下さったのは、このことだけでした。教会について、 sacrament について、その他の教会の教えについて知ったのは、先生が日本を去られ、逝くなられた後のことでもあります。”と述べられているが、この回顧談と神道破斥中の宗義の内容を比較すると、全く同一の教えであることを発見する。ただ“述宗義”の最後にキリスト教来世観が記されているが、これは実にオーソドックスな来世観である。キリスト教の異教伝道に際して必ず直面する問題は来世観で、来世観のない宗教はないので、それに対応してキリスト教来世観を明確に説得する必要性が生じてくる。それにはオーソドックスなキリスト教来世観の提示があらねばならない。C・M・S 宣教師にとっても、来世観は大切なメッセージの一つであった訳である。その一例として第19世紀の中葉に、英米の神学界を一時風靡した思想に、制約靈魂不滅論 (Conditional Immortality) がある。こ

これは後に一流の神学者中にもこの学説に賛同する者もあったが、聖書至上主義を立前とするC・M・Sにおいては認められず、例えば函館在住のC・M・S宣教師デニング師は、この来世観を信じて、これを教義として宣教する許可を申し出たときに、C・M・Sはこれを認めずに反って異端説として同師を罷免している。これは1882年のことである。それで当時C・M・S本部においてはオーソドックスな来世観が伝道の中心教義とされていたことが考えられるのである。かくの如く“神道破斥”中のキリスト教教義と、エンソー師が再度来日の際に説かれたキリスト教の根本の教えを比較するとき、全く同一であることを知り内容的にもエンソー師の著作と断ずることができると思う。

なお同師の日本語の著作“*Akuno Dai Biyo*”については何らの手がかりのないことを記しておく。

## む す び

前述の如く、C・M・Sの中国、日本伝道は決して偶然に思いついて始められたものでもなく、中国伝道はC・M・S創立後、間もなく計画されたことであり、日本伝道は我国が固く鎖国の扉を閉ざしていた折に、既に祈りのうちに計画されていたものであった。さらに他の伝道団体を考慮しても、ロンドン伝道会のメドハースト師は、1830年(天保元年)に最初の英和、和英字彙を出版し、これは聖書邦訳の羅針盤ともなった。オランダ伝道会のギュツラフ師は、1837年(天保8年)頃に、「約翰福音之伝」を出版している。日本伝道は中国伝道と切り離すことのできない一環した計画であったのである。ことに日本聖公会にとっては、初代主教ウイリアムズ師は、主教として任命された教区は、中国、日本の全般にわたるもので、その主教名は“中国並びに日本主教”(Bishop of China and Japan)であった。さらにC・M・Sにおいても、日本最初のC・M・S宣教師エンソー師を始め、明治17年までは在日宣教師は全て香港ビクトリヤ教区主教の管轄下にあった。筆者はC・M・Sの日本開教伝道を記すに際して、中国伝道に筆をおこしたのはこの所以である。

欧米の海外伝道は、第17世後半に、ヨーロッパ及び英国に興った信仰復興運動の現われで、これが英国民の内的生活を深く革新し、伝道生活をきよめ、人道的精神を奮いたたせ、これが海外伝道の基礎となったのである。中国伝道

は、1842年、南京条約が締結され、香港が英領として譲渡され、5港が開港されるとともにキリスト教は公然と中国本土内に伝道を開始することができた。しかしその伝道は決して容易なものではなかった。日本においては、中国で天津条約が結ばれた1858年（安政5年）に日米修好条約が結ばれ、同年米国より始めて新教の宣教師が送られた。英国よりは10年おくれて宣教師の来日があった。当時は切支丹禁制の高札が辻々に立っている時代で、1873年（明治6年）にそれが撤廃されるまでの15年間は、特に明治に及んでは、常に諜者にスパイされ、声をひそめて伝道する時代であった。高札の撤去にともない、英米の伝道団体は次々に宣教師を派遣した。ここでC・M・Sも開教伝道時代より、初期伝道時代に入るのである。筆者は前述の如く、C・M・Sの日本開教伝道について概述したが、その伝道は日本の地域的風土とその文化と歴史を離れては成立がありえないことは言うまでもない。そしてその開教伝道時代は明治維新の直後である。それで明治維新の精神史的文化的発展の跡を明かにして、その背景の下にあるC・M・Sの伝道の意義を究明することによって結論を導き出すことになるのだが、本稿ははじめに記した如く、資料の収集という予備的段階にとどめたい。歴史的な個々の事実や大小の状況を正しく捉えて、これを歴史の大きな流れの中に位置づけたいという願いが筆者の自戒である。

エンソー、バーンサイド両師の伝道とその生涯を思うときにステフェン・ニール主教の言葉を想起する。師はその著「新約聖書の(註38)解釈」のうちに次のように記しているが、師自身がインドの宣教師であったことを想うときに心を打つものがある。

“伝道者は歴史の流れの中に、己れを完全に水没する者である。その歴史とは泡沫の如くに浮沈するこの世の事相の連続ではない。伝道者は常に神聖なる神の歴史を創造する者である。彼らによっていま生じていることは、史上いまだ曾つて存在しなかったものである。神の御言を聞いたことのない者、神を知らぬ者、希望のない者、これらの者が不思議な神の摂理の中に、今は神の御言を聞き、且つ信じているのである。この部落において始めて洗礼が行なわれた。あの村落において始めて聖餐式が執行された。主キリストが最中に立ち給うことを信じて、聖卓の周りに信徒らは打ち集うた。これらは福音の付帯現象ではない。価値なき第二義的なものでもない。これが福音なのである”。

C・M・Sの日本開教伝道、則ちエンソー、バーンサイド両師の伝道事蹟は、その教えを受けつぐ日本聖公会の牧師、信徒の間にも全く忘れさられている。

“歴史の流れの中に水没され”てしまったのである。しかし人々に忘却された諸師の事蹟こそは、“神の歴史”に1頁を加えていることを忘れてはならない。

“ああ深いかな、神の富と知恵と知識は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。だれが主の心を知っているか。だれが主の相談相手であったか。だれが先づ主に贈り物をしたのか、そしてだれがその報いの贈り物を受けるのか。主は全てのみなもとであり、みちびきであり、目的である。とこしえに栄光が主にあるように。アァメン”。(ロマ書第11章13節。The New English Bible New Testament. による。)

#### 注

(注1) Eugene Stock: The History of the Church Missionary Society vol. I. pp. 57-67.

(注2) Joseph Schmidlin: Einführung in die Missionswissenschaft. s2, 6f.

(注3) J. Richter: Evangelische Missionskunde. s. 4.

(注4) Vincent Taylor: The Gospel According to St. Mark. p. 612.

(注5) Church Missionary Society: Register of Missionaries, p. 1.

(注6) Eugene Stock: The History of the Church Missionary Society, vol. I. p. 467.

(注7) カール・ギュツラフ師は1803年、独乙のプロシヤに生れ、その洗礼名はKarl Friedrich August Gützlaff で、国籍は独乙人であった。ギュツラフは和蘭伝道会 (The Netherland Missionary Society) の宣教師であったが、中国キリスト教新教史上で忘れることのできない人物で、中国宣教師としては最も活動した人物であった。彼の著書を通じて多くの宣教師が献身したが、なかでもアフリカのリビングストン師、日本のフルベッキ師らは、直接ギュ師の講演の感化であり、またハドソン・テイラー師の支那内地会は、ギュ師の創設した支那福音会の後身である。ギュ師は三回にわたり、中国沿岸を航海したが、1832年、第2回の航海においては、朝鮮王に書を奉呈して、その帰路、日本来航の目的であったが、果しえず、琉球に来航して日本人水夫らと語っている。「モリソン号事件」ではギュツラフ師は2名の宣教師とともに乗船して、日本のキリスト教化の門戸を開く手がかりを得んと試み、また最初の日本訳聖書、「約翰福音之伝」は彼の訳である。また彼の最大の功績はサー・ハリー・パークス (Sir Harry Smith Pa-

rkes) を教育養成したことである。パークスは少年時代よりギュラフ家に養われ、中国語を修め、英国の外交官となり、慶応元年、駐日英国公使として赴任し、明治維新に際して我国に深い印象を残した。ギュ師は1851年1月東洋伝道の壮図をいただきながら中国で歿した。時に48才、その墓は香港にある。

(注8) Eugene Stock, Op. Cit., vol. I. p. 468.

ギュツラフは師 “ゼントルマン階級出身者でない者” という答申をしたが、アフリカ、インドにおいては、その宣教師中、ゼントルマン階級出身者は、陸海軍と同様に、伝道戦線においても、よく困難にたえ、他の良き模範であった。1850年、C・M・S・総主事ヘンリー・ベン氏の中国巡回により、ギュツラフの意見の誤謬が確認された。

(注9) サムエル・キッド師は、1824年倫敦伝道会の宣教師として中国に布教を志し、東洋最初の泰西の教育機関である。マラッカの英華学堂の学長をつとめ、帰国後は一時田舎に牧会生活をしたが、のちに抜擢されてロンドン大学、支那文学教授となった。

(注10) Eugene Stock: Op. Cit., vol. II. p. 597.

(注11) The Church Missionary Intelligencer. vol. V. new series, 1869. pp. 349-352.

(注12) Eugene Stock: Op. Cit., vol. II. p. 597.

(注13) The Chinese Repository, vol. XIX. “Letter from B. J. Bettelheim” pp. 17-49, pp. 57-90.

(注14) 佐波 亘著 植村正久とその時代 第4巻 pp. 20-44.

(注15) Chinese Repository, vol. XIX. p. 623.

なお英国汽船が日本領土を訪れたのはこれが始めてであり、レイナード号の琉球に向うことは、前もって江戸の日本政府に通達されていたらしいと記している。

(注16) 「植村正久とその時代」第4巻の22頁にベツテルハイム訳「路加伝福音書」の写真版がのっている。その説明の終りに小林誠蔵と記されているが、これは筆者が忘れえぬ印象の聖書である。小林誠は筆者の実の叔父で、永いあいだ以前の日本基督教会両国教会の牧師であった。このベツテルハイム訳路加伝福音書は古書好きな亡父が、某古書店で入手して、叔父に贈ったものである。叔父はこれを珍藏していたが、関東大震災の折に、家族6人とその持物のすべてを失ったときにこの聖書も焼失した。筆者は今なおこの漢和对訳のベツテルハイム路加伝が眼に浮ぶのは不思議である。

(注17) T. H. Darlow and H. F. Moule: Historical Catalogue of the Printed Editions of the Holy Scripture in the Library of the British and Foreign Bible Society, London, 1911. pp. 850-851.

(注18) George Smith: Ten Weeks in Japan, (London, Longman, 1861.)

(注19) エンソー師の日本伝道は、中村光尾老姉の教示によるところが多いので、ここに厚く感謝の意を表したい。老姉は再度来日した折にエンソー師による最後の受洗者で、永く聖使女学院副院長の職にあつて、日本聖公会の多くの婦人伝道師を養成された。また同師の息女E・V・エンソー嬢(1911年より14年までC・M・S婦人宣教師として東京に伝道する。)との親交が深くあった。老姉は“エンソー先生のあの熱情をこめた伝

道ぶりは、アイルランド人の典型です”と語られて、師のプロフィールをよく示して下さった。元田博士は、日本宗教講座の「日本聖公会」の項中に“30有余年の後、再来したエンソー師を迎えて有志が歓迎祈禱会を開いたが、師は日本語で祈禱され、その語学の天才に驚嘆した”とあるが、中村老姉は“先生の日本語は余り上手ではなかった”と評されているが、同師の伝道に対する熱情が人々を動かしたことであろう。師の聖書研究会には、若き日の神近市子らが出席していた由。

(注20) 「日本聖公会百年史」の編者はエンソー師の日本伝道への召命を次の通り記述している。“エンソー師は……ケンブリッジ・クイーンズ・カレッジを卒えてパークシャーにある一教会の牧師に就任した。ここに数年を過すうち、師は日本伝道の召命を強く感じ、C・M・S本部に自己の決意を申し送った。協会は当時の日本の状態に不安を感じたが、師の堅い決意を見て、エンソー師を日本に派遣することに決した”とある。これらは師の履歴書とC・M・S伝道史による事実と反することは明白であるが、筆者が特に強調したい点は、C・M・Sの日本最初の伝道者は、自己の願いや希望で日本に送られたのではなく、本部が予定していた中国派遣が不可能となり、それが一転して日本に送られたという神の不思議な摂理を感んずることを銘記したい。

(注21) The Centenary Volume. pp. 696-699.

(注22) The Centenary Volume. pp. 696-699.

(注23) The Church Missionary Intelligencer, vol. III. new series, p. 119.

(注24) 小沢三郎著 幕末明治耶蘇教史研究 76頁

山村エンソー帰国前事情話

1. エンソー齒痛ニ而4月8日横浜行蒸気船ニ而長崎出帆横浜より出帆し而北氷海を乗り帰国候……エンソー曰く一兩年の間齒痛為療治帰国致し又候再遊……可申候。

(注25) Eugene Stock, Op. Cit. vol. IV. p. 365.

(注26) The Church Missionary Intelligencer, vol. V, New series, pp 242~245.

(注27) C・M・Collegeは1825年の創立で、1915年第1次世界大戦時に閉鎖された。90年の歴史を有する同神学校は幾多の優秀な宣教師を輩出した。我が国に於ても、日本最初の管轄主教、香港のバードン主教、ワレン師、モンドレル師、ハッチンソン師の各アーチデイコン、大阪聖三一神学校長チャップマン師、総裁主教ヘーズレット師らはいづれも同校の卒業生である。

(注28) G. F. Verbeck: History of protestant Mission in Japan. (Proceedings of the General Conference of the Missionaries of Japan. Held in Tokyo. Japan, 1900.) p. 774.

(注29) 小沢三郎著 日本プロテスタント史研究 pp. 84-85.

(注30) 旧師山県雄杜三先生が“小島一騰翁”と題して、彼の自伝を基督教週報、1595号と1596号に二川の受洗前後の記事を掲載している。

(注31) 小沢三郎著 日本プロテスタント史研究 pp. 286-287.

(注32) The Church Missionary Intelligencer. Vol. V. new series, p. 135.

(注33) The Church Missionary Intelligencer, vol. X. new series pp. 131~137.

(注34) C. D. Snell: Japan and Japan Mission. C. M. S., London, 1905, p. 85.

(注35) 吉田寅校訂, George Ensor 著, 二川一騰校, 神道破斥

昭和39年8月, 19世紀東亞キリスト教史研究第2。

(注36) 信経問答, 第24葉。これは刊行年月と著者名は未記載であるが, ウィリアムズ主教著, 明治6年刊行。

(注37) C・M・ウィリアムズ著 使徒信経問答 明治9年刊行 第31葉~32葉

(注38) S. C. Neill: The Interpretation of the New Testament. p. 268.

### 参 考 文 献 抄

Anderson, Gerald H.: The Theology of the Christian Mission. (S. C. M., 1961.)

Awdry, Frances: Daylight for Japan. (Bemros and Sons, 1904.)

Cary, O.: A History of Christianity in Japan, Protestant Missions. 2 vols. (Chicago, 1909.)

Chinese Repository (The) vols. XIX and XX. Canton, 1850 and 1851. (Reprinted in Japan, Maruzen, Tokyo.)

Church Missionary Atlas (The). C. M. S. London, 1896.

Church Missionary Intelligencer (The) vols. VIII, IX, X, XI, new series. (C. M. S., London, 1872, 1873, 1874, 1875.)

Church Missionary Intelligencer and Record (The). vol. I, new series. C. M. S., London, 1876.

Church Missionary Gleaner (The), C. M. S., London, 1901.

Church Missionary Record (The). C. M. S., London, 1872, 1873, 1874.

C. M. S.: Register of Missionaries. (Clerical, Lay, Female and Native Clergy from 1804 to 1904.) Printed for Private Circulation

C. M. S.: The Centenary Volume of the Church Missionary Society. C. M. S., London, 1902.

Creighton, Louise: Missions. (H. U. L.) (Williams and Norgate, 1912.)

Crockford's Clerical Directory for the year 1935. (Oxford, 1935.)

Cross, F. L.: The Oxford Dictionary of the Christian Church. (Oxford Univ. Press, 1961.)

Darlow, T. H. and Moule, H. F.: Historical Catalogue of the Printed Editions of the Holy Scripture in the Library of the British and Foreign Bible Society, (London, 1911.)

Dwight, H. O. (edt): The Encyclopedia of Missions. (Funk and Wagnalls, 1877.)

海老沢有道著 日本の聖書 日本基督教団出版部 1964年

Gaidner, W. H. T.: Edinburgh 1910: An Account and Interpretation of the World Missionary Conference. (Oliphant, Anderson and Ferrier, 1910.)



- Hammer, Raymond : Japan's Religious Ferment. (S. C. M. Press, 1961.)  
 比屋根安定著 明治以降の基督教伝道 大八州出版K. K. 昭和22年
- Headland, E.: Brief Sketches of C. M. S. Warkers. (C. M. S., 1897.)  
 石原 謙著 学究生活の思い出 石原謙博士文集刊行会 昭和34年  
 石原 謙著 日本キリスト教史論 新教出版社 1967年
- King, A. F.: Edward Bickersteth, Missionary Bishop in Japan. 教文館 大正3年
- Kraemer. Hendrik : Religion and the Christian Faith. (Lutterworth Press, 1956.)
- Kraemer, Hendrik : The Christian Message in a Non-Christian World. (London, 1938.)
- Latourette, K. S.: A History of the Expansion of Christianity. (Harper and Brothers, 1937-1945.)
- Living Church Annual (The). The year Book of the Episcopal Church. (Morehouse-Gorham Co., 1961.)
- 溝口靖夫著 東洋文化史上の基督教 理想社 昭和16年
- 元田作之進著 日本聖公会史 普光社 明治43年
- 元田作之進著 老監督ウイリアムス 京都地方部故ウイリアムス監督記念実行委員事務所  
 発行 大正3年
- 元田作之進著 日本聖公会 「日本宗教大講座, 基督教編」 東方書院 昭和5年
- Neill, Stephen C.: A History of Christian Missions. (Penguin Books, 1964.)
- Neill, Stephen C.: The Interpretation of the New Testament. (Oxford Univ. Press, 1964.)
- 日本聖公会歴史編纂委員会編 日本聖公会百年史 日本聖公会教務院発行 昭和34年
- Official Year Book of The Church of England. (Church Assembly, 1935.)
- 岡田純一編 日本の風土とキリスト教 理想社 昭和40年
- 小沢三郎著 幕末明治耶蘇教史研究 亜細亜書房 昭和19年
- 小沢三郎著 日本プロテスタント史研究 東海大学出版会 1964年
- Richter, J.: Evangelische Missionskunde. (Leipzig, 1920.)
- Ritter, H: A History of Protestant Mission in Japan. (tras. from the German by G. E. Albrecht and revised by D. C. Green,) Tokyo, 1898.
- Robinson, C. H.: A History of Christian Mission. (T & T. Clark, 1915.)
- 佐波 亘著 植村正久とその時代 第1巻～第5巻 教文館, 昭和41年復刻版
- 佐伯好郎著 清朝基督教の研究 春秋社 昭和24年
- Smith, George : Ten Weeks in Japan. (Longman, London, 1861.)
- Snell, C. D.: Japan and Japan Mission of the Church Missionary Society. (4th, New Edition) (C. M. S., 1905.)
- Stock, E.: The History of the Church Missionary Society. 3 vols., (London, 1899.)

- Stock, E.: The History of the Church Missionary Society. Supplementary Volume. (C. M. S. London, 1916.)
- Schmidtlin, J.: Einführung in die Missionswissenschaft. (Münster in Westfalen, 1925.)
- Strong, E. B.: Directory of Foreign Mission. (International Missionary Council, 1933.)
- 高谷道男 カール・ギョツラフの生涯 福音新報, 2271号～2274号 (昭和14年)
- Tucker, H. St. G.: History of the Episcopal Church in Japan. (New York, 1938.)
- Verbeck, G.F.: History of Protestant Missions in Japan. (Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries of Japan, held in Tokyo 1900.) Tokyo, 1901.
- Warren, M. A.C.: The Christian Mission. (S. C. M. Press, 1953.)
- Warren, M. A. C.: The Missionary Movement from Britain in Modern History. (S. C. M. Press. 1965.)
- 山県雄杜三 (鷗淮) : 小島一騰翁 基督教週報 昭和9年 1595～96号
- 吉田 寅 : 神道破斥 19世紀東亜キリスト教史研究 第2, 昭和39年